巨男の話

新美南吉

巨男（おおおとこ）とお母さんの住んでいたところはここからたいへん遠くのある森の中でした。巨男（おおおとこ）のお母さんはおそろしい魔女（まじょ）でした。ほら、鷲（わし）のような高い鼻や、蛇（へび）のような鋭（するど）い眼（め）を持ったあのおそろしい魔女（まじょ）でした。

それはあるお月夜のことでしたよ。魔女（まじょ）と巨男（おおおとこ）がねむりについたころ、だれか家の外から戸をたたきました。巨男（おおおとこ）が起きていって戸をあけてみると、ふたりの女が、ひとりの少女をつれて立っていたのです。

「この方は、この国の王女様です。私たちは侍女(じじょ)なんです。今日(きょう)、森へ遊びにお姫様(ひめさま)をおつれ申(もう)したところ、道にまよってとうとうここへきてしまいました。どうか、今晩(こんばん)だけ宿(やど)をかしてください。」とひとりの女がいいました。

　すると、奥(おく)から、

「どうぞ、むさいところですが、ゆっくり休んでください。」と魔女(まじょ)がやさしい声でいいました。そこで三人は、中へはいって休みました。

　よく朝、巨男(おおおとこ)が眼(め)をさましてみると、ふたりの女は、黒い鳥に、お姫(ひめ)さまは白鳥にかわっていました。それ

は、魔女（まじょ）が、魔法（まほう）でそうしたのです。魔女（まじょ）は、巨男（おおおとこ）のとめるのもかまわず、三羽（ば）の鳥を、窓（まど）から投げ出してやりました。三羽の鳥は飛んでいきました。けれど、白鳥は、夕方になると悲しげに鳴いて魔女（まじょ）の家に帰ってきました。巨男（おおおとこ）は不憫（ふびん）に思って、こっそりと白鳥を飼（か）ってやることにしました。昼間は野原へ放ってやって、夜は自分のベッドの中でねさせました。

巨男（おおおとこ）が、大きくなるにつれて魔女（まじょ）は、だんだん年をとって、ついに動けなくなりました。それで、毎日ベッ

ドの上に横たわって、息子の巨男に魔法を教えました。けれど、その魔法は、みな、人間を種々の鳥獣にかえるものでした。

　そのうちに、魔女はますます弱って、もう死にそうになりました。このときに、魔法をとく法を聞いておかねば、あの白鳥は、いつまでたっても、お姫様にかえれないと思ったものですから、巨男は、魔女の枕もとによって、

「いままで、お母さんは人間を種々の鳥獣にかえる法を教えてくださいましたが、まだ、魔法をとくことを教えてくれません。どうか教えてください。」とた

のみました。

「では、教えましょう。」と、魔女はいいましたが、もう息もきれぎれで、声は蚊のようです。

「お母さん、はっきりいってください！」

巨男は、魔女の口もとへ耳をもっていきました。

「その鳥獣が、涙を流せば、もとの姿にかえるよ……」これだけいうと、魔女は、頭をたれて死んでしまいましたよ。

巨男は、死んだ魔女を白い棺におさめて、椰子の木の根もとにうめました。そして、すぐ白鳥をつれて森の家を出ました。

巨男(おおおとこ)は、都(みやこ)へのぼろうと思いました。途中(とちゅう)でどうかして、白鳥に涙(なみだ)を流させようとしました。頭をたたいたり、お尻(しり)をつねったりしたのです。けれど白鳥は、けっして一滴(てき)さえ涙(なみだ)を出しませんでした。ただ、悲しそうな声をあげたきりでした。おしまいには、かわいそうになって、巨男(おおおとこ)はいつのまにか白鳥に頬(ほお)ず、、りをしていました。そして巨男(おおおとこ)の眼(め)に涙(なみだ)がありました。

巨男(おおおとこ)は、夜となく昼となく歩き通して、家を出てから七日目に、めざす都(みやこ)に着きました。けれど、都の人びとは、巨男(おおおとこ)がおそろしい魔女(まじょ)の息子(むすこ)だということ

を知っていましたので、とおまわしに巨男(おおおとこ)を殺(ころ)そうと考えました。そこでひとりの男が総代(そうだい)となって、王様の住んでいられる宮殿(きゅうでん)へまいりました。そして、王様にこう申(もう)し上げたんです。

「王様の宮殿(きゅうでん)は、美しいけれど、大理石の建物(たてもの)がないのは、玉にきずだとある旅人(たびびと)が申(もう)していました。大理石の塔(とう)でもたてられてはいかがですか？」

「なるほど、それはよかろう、しかし、大理石というのは、いったいどこにあるのか？」

「ここから、ずーっと南の方へ、山を一つと沙漠(さばく)を一つこえていくと一つの部落に着きます。そこに、大理

石はいくらでもあるそうです。」

「そうか、けれどだれがとりにいくのか？」

「それは、いま都にいる巨男がよいでしょう。彼はたけが椰子の木ほどで、一足で小さな丘をこえてしまいます。」

「では、その男をよべ。」

巨男は宮殿につれられていきました。そして王様から、大理石をとりにいくように命ぜられました。にげるといけないからというので、巨男の足には鉄の鎖がむすばれました。

「ではいってきます。」と巨男はいって、やはり白鳥をつれ、南の方へ旅立ちました。巨男の進むにつれて、宮殿にたまっていた鎖が少なくなりました。ちょうど十九日目に、その鎖のたまりはなくなって、はしが太い柱にむすばれてある鎖は、ピンとはりました。

そのときには、巨男も種々難儀をして、大理石の部落に着いていました。部落の人びとは、たいへん親切でしたので、大理石をいくらでもくれました。巨男は大きな大理石を三つもらって、それを背負い、白鳥をその上にとまらして帰途につきました。

都の方では、はっていた鎖がゆるんできたので、

人びとはそれをたぐりました。帰りには、重い石をもっていたので、巨男（おおおとこ）は三十日かかってやっと都に到着（とうちゃく）しました。

苦しい長い旅のために、巨男（おおおとこ）はやつれはてて枯木（かれき）のようになりました。しかしそれでもゆるされなかったんです。すぐその日から、宮庭（きゅうてい）の泉（いずみ）のほとりに、大理石で塔（とう）をたてることをおおせつかりました。けれど、心の美しい巨男（おおおとこ）は、けっしてなげいたり、悲しんだりしなかったのですよ。命ぜられた通り、毎日毎夜、つちとのみを持って、大理石を切り、それをだんだん

つみかさねていきました。巨男(おおおとこ)は、仕事をしているときでもあの白鳥を背(せ)にとまらしていました。白鳥もおとなしくとまっていました。巨男(おおおとこ)は、つちをふりながらちょうど人間にいうように白鳥にいいました。

「お前は、いったいどうしたら涙(なみだ)を流すのか？　お前はいつ涙(なみだ)を流すのか？　お前は涙(なみだ)を流さなくては、いつまでたっても、お姫(ひめ)さまにはなれないのだよ、私はお前がかわいそうだ。だから早く美しいもとのお姫様(ひめさま)にかえってくれ。」

　そんなときには、白鳥は首をたれて巨男(おおおとこ)の話を聞いていましたが、涙(なみだ)を流したことはありませんでした。

巨男の仕事は、どんどん進んでいきました。夜ふけでも、つみ上げられた塔の上から、つちの音が都の空にひびきました。都の人びとは、ねる前に、きっと窓をあけて巨男の働いている塔の上をみました。そこには、星と同じような灯の光が、またたいていたんです。

三月もたつと、巨男がとってきた大理石はつきてしまいました。塔の高さは宮殿のどの建物よりも高くなりました。それでも、王様は、それでよいとはおっしゃいませんでした。そこで、巨男はふたたび南方へ旅立ちました。長い鎖をひきずって、白鳥をつれ、

巨男（おおおとこ）は広い広い沙漠（さばく）をくる日もくる日も歩いていきました。巨男（おおおとこ）は、また大きな大理石を三つもらって都（みやこ）に帰りました。すぐその日からつちとのみをとってそれを切りはじめました。

塔（とう）はますます高くなりましたよ。

空がくもって星がみられない夜でも、巨男（おおおとこ）の灯（ひ）はたった一つの星のようにポツンとうかび出ていました。

それは、すこし風のつよい宵（よい）でした。都（みやこ）の人びとは、窓（まど）から塔（とう）の上の灯（ひ）をあおいでみました。灯（ひ）は風のために、ゆらゆらゆれていました。人びとはそのとき、は

じめて巨男(おおおとこ)がかわいそうになりました。王様も窓(まど)から顔をお出しになって、塔(とう)の上をみました。ごーごーとなる風のすきまに、巨男(おおおとこ)のつちの音がかすかに聞こえてきました。やはり王様も巨男(おおおとこ)をあわれにお思いになったのか、

「こんな夜に働かせておくのは気(き)の毒(どく)だ。それにあの男は、おとなしい。明日(あした)はもうあの仕事をやめさせよう。」とひとりいわれました。そんなことはすこしも知らずに、巨男(おおおとこ)はこつこつやっていました。そして、どんなことをしたら白鳥をなかせてお姫様(ひめさま)にさせることができるだろうと考えていました。ふと、巨男(おおおとこ)は

自分が死んだら――と考えました。そこで、温かい巨男(おおおとこ)の背(せ)でねむっている白鳥に話しかけました。

「私が死んだら、お前は悲しくないか？」

すると白鳥は眼(め)をさまして、「そんなことをしてはいけない」というように羽ばたきしました。

「私が死んではいけないのかい？　それなら、私が死んだらお前は涙(なみだ)を流すにちがいない。よし！　私はお前のために天国へいこう。」

　巨男(おおおとこ)は立ちあがって、背中(せなか)から白鳥をおろしました。

白鳥は、とめようとして、巨男(おおおとこ)の着物のはしを引きました。巨男(おおおとこ)は、白鳥と最後の頬(ほお)ずりをして、

「では、かわいい白鳥よ、さようなら、お前はもとの美しいお姫様に帰るのだよ……」といって、高い塔の上から身を投げました。地に落ちるとただちに死んでしまいました。

白鳥は、どんなになげいたことでしょう。涙は滝のように出ました。そして、そのとき魔法はとけて、うるわしいもとの王女になりました。王女はなきじゃ、、くりながら、高い塔の階段をころがるように走りおりて、お父さまの王様の部屋にとびこみました。

そして、いままでのことを王様に話したんです。王様はそれを聞いて、面をふせて巨男に謝罪し、また

感謝しました。

まもなく、王様から都の人びとへそれが伝えられたとき、都の人びともないて巨男にあやまりました。

巨男のむくろは月桂樹の葉でおおわれて都の東にある沙丘に葬られました。

王女は、よく王様やお母さんの后に申しましたよ。

「私は、いつまでも白鳥でいて、巨男の背中にとまっていたかったわ。」

空がくもっていて、金星がたった一つうるんでみえる夜ふけなど、南国の人びとはいまでも、

「あれは、巨男(おおおとこ)の灯(ひ)だ。」と空をあおいで申します。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：もりみつじゅんじ
校正：鈴木厚司
2003年5月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。